

伝えよう、このゆたかな世界を！

2016.3.23

於県立長野図書館

清水眞砂子

本日ふれる予定の本、映画 etc

- 1) 『こんなの、大人じゃない—おばあさん先生が教えてくれる大人たちの嘘』  
(『大人になるっておもしろい?』岩波ジュニア新書 清水眞砂子著 岩波書店 2015の韓国語版タイトル日本語訳)
- 2) 『いまファンタジーにできること』(アーシュラ・K.ル=グウィン著 河出書房新社 2011)
- 3) 『日本の反知性主義』犀の教室(内田樹編 晶文社 2015)
- 4) 「コマーシャルソングには半音は使えないんです。」(小林亜星)  
(『大人になるっておもしろい?』岩波ジュニア新書 清水眞砂子著 岩波書店 2015より)
- 5)映画「パリ20区僕たちのクラス」(ローラン・カンチ監督 仏 2009)
- 6)「ふるえよう、このゆたかな世界で」
- 7)『百まいのドレス』(エレナ・エステイス作 岩波書店 2006)
- 8)『ゼバスチアンからの電話』(イリーナ・コルシュノフ作 白水社 2014)
- 9)『もりのなか』(M.H.エッツさく 福音館書店)  
『わたしとあそんで』(M.H.エッツさく 福音館書店 1980)
- 10)『まつりちゃん』(岩瀬成子作 理論社 2010)
- 11) “傷つく権利”(R.サトクリフ著『思い出の青い丘』岩波書店 1985より)

- 12) 『まぼろしの小さい犬』(フィリパ・ピアス作 岩波書店 1989)  
『トムは真夜中の庭で』(フィリパ・ピアス作 岩波書店)  
『ペットねずみ大さわぎ』(フィリパ・ピアス作 岩波書店 1984)
- 13) 『魔女ジェニファとわたし』岩波少年文庫 (E.L.カニグズバーグ作 岩波書店 2001)  
『ベーグル・チームの作戦』岩波少年文庫 (E.L.カニグズバーグ作 岩波書店 2006)
- 14) 『夜』(エリ・ヴィーゼル著 みすず書房 2010)
- 15) 『イエルサレムのアイヒマン』(ハンナ・アーレント著 みすず書房 1994)
- 16) 「われよりも熱き血の子は許しがたく 少年院を妬みて見をり」(春日井健)  
(永田和宏著『現代秀歌』岩波新書 岩波書店 2014 より)
- 17) 『オヤジ国憲法でいこう!』よりみちパン!セ (しりあがり寿+祖父江慎著  
イーストプレス 2012)
- 18) 『イタリア精神医療への道』(レンツォ・ステファニ著 日本評論社 2015)

## 講義記録

こんにちは

座ると声がでませんので、立って話をさせていただきます。

これから与えられている時間は1時間ちょっと、私の話はいつもはだいたい2時間なんですけれど、さてこれで大丈夫か心配です。越えそうですがなんとか収めたい、収めるよう努力いたします。

長野市は3回ほど伺って、とても助けてもらったのが、善光寺のお戒壇めぐりで、『ゲド戦記』の第二巻の地下迷宮の空気を察知するのに、触りながらたどった恐怖とか不安とかいろんなものが蘇ってきまして、その体験がとても助かりました。世界のあっちこっちに地下迷宮というのはあるのでしょうかけれど、遠くまでは行けませんので。ついでに申し上げると、第二巻を訳し終えてからメキシコにでかけました。なぜでかけたかかかという、ティオティワ坎ンのピラミッドの石段を自分の足で登って見たかった。第二巻には子どものテナーが神殿に向かって登って行く場面がありますが、あの石段の蹴上がりの高さ子どもとの足の長さから来る登ることの困難さ。それがどういうものだったのか。その身体感覚を少しでも想像してみたかったのです。大人の私は、若いテナーより石段を登るのははるかに楽だったはずですが…。



今日のこの会のために図書館の方が提案して下さったのは、「伝えよう、このゆたかな世界を」という演題です。おそらく昨年5月に出した『大人になるっておもしろい?』という岩波のジュニア新書をお読みになってのことだろうと思います。

実はこの4月に韓国語版が出ることになっておりまして、韓国語版のタイトルが面白いんですね。『こんなの、大人じゃない。おばあさん先生が教えてくれる大人たちの嘘』。私は最初聞いた時、まあ、おばあさんというのはよくわかる。実態だし。先生というのも、日本では偉そうに聞こえますが、韓国では年配の人をみんな先生と呼びます。その辺は留学生から教わりました。だからそれも仕方ない。それより何よりおっと思ったのは、こちらの方がずっと本質をとらえているかもしれないということです。とてもラディカルだとも。本質的という意味です。

こんなの大人じゃない。というのは、「え、あの本からこれが出てくる？」って一瞬思ったのですが、やがて気づきました。大人たちの嘘というのは、大人たちが、穏やかなのはいいことだとか、やさしくなるのがいいことだとかいろんなことを言って子どもたちを躰けようとするし、怒っちゃいけないとか、喧嘩はいけないとか言うけれども、そんなことはないんだ。それを韓国の関係者はまず伝えたかったんですよね。私はあの本で、喧嘩はとても大事だと言っているわけですし、そんなことを考えますと、こちらの方がぐさっと

本質を突いてくれたタイトルなんだな。日本語のタイトルは編集者が考えたんですけど、いささか穏やかで、本質にふれるところまで言っていないのかもしれない。そういう意味で、タイトルだけ見ても文化の違が浮かび上がってきて面白いと思いました。

さて今日は、この演題「伝えよう」をひっくり返すことができたなら、と思っています。タイトルをつけて下さった方には申し訳ないけれど。もちろんこれで一度は OK と思ったのですよ。でも何かひっかかっています。今日のこの会だけでなく、ここ何年、特にここ十年くらい、子どもの本の運動に関わっている方々とお会いしたり、自分自身も多少は運動に関わりつつ、何か足りない、何か違う、という思いがずっとしてありました。

青山学院大学のキャンパスで初めての先生とお会いする時など、専門はと聞かれ、私が子どもの本の分野ですというと、ほとんどの方が、「まあ、夢があつていいですね。」「夢があつて明るくていいですね。」と言う。私はそういう返事を聞くと、ああ、この人には話してもしょうがないなと思ってきました。一応歳はとっていますから、「はあ、まあ」と一応は愛想よくふるまいます。それくらいの技術は身につけてきました。でもこの人には話しても通じないだろうな、と思ってきました。「夢があつていいですね」って、たいていの人が言うんですね。子どもの本ってそういうふうにとらえられているんだと思う。ファンタジーなんて言おうものなら、さらにそうなんです。「夢があつていいですね」と。ふわふわした世界だと思われている。夢があつて、やさしくて、あつたかくて、ほかほかしている。そういう空気を持った世界だと思われているんだということを、いつも思い知らされてきました。

じゃあ、子どもに手渡すことをしている人たち、実際に子どもと接している方々はどうか。子どもの本を読むと、いえ子どもと言わなくても、本を読むことどうなるかということ、よく言われるのが「心が豊かになる」ということです。この言葉はものすごく曖昧で、では心が豊かになるってどういうことと考えているのかと問いつつ、いろいろな形でうかがううちにだんだん見えてくるのは、「心おだやかになること」「人に親切になること」「他人の苦しみがよくわかるようになること」そういう風にとらえられているのではないか。ということです。もっとおおざっぱに言えば「心が平らかになっていくこと」。ざわついていた心が、あるいはとがっていた心が平らかになっていくこと。そういう風にとらえられている。そんな気がします。

私はそこに今、非常に引っかかっています。ここにお集まりの方々も、あえて言いますが、本を読んで心が豊かになるといっても、なにをもって心が豊かになったというのか、その点はあまりつっこんで考えてこなかったのではないかという気がします。私は今そのこととてもが気になっています。心が豊かになると本当に他人の気持ちがわかるようになるとか、やさしくなるとか、そんなことだけ？と言いたくなる。

私自身の読書体験をちょっとお話しすると、例えば、エリ・ヴィーゼルの『夜』を読んだ時、自分の中で何が起こったか。結論からいうと、自分もまた同じ状況下では自分が生きのびるために父をすてるだろう、母を捨てるだろうという愕然たる気付きです。あの本

には第二次世界大戦末期、いよいよ追い詰められたナチス・ドイツ支配下のユダヤ人収容所の撤退の様子が描かれていますよね。詳しくは読んでいただくことにして、被収容者ごとの撤退の移動の中で、まだ若かったエリ・ヴィーゼルは、年取ったお父さんの手をひいて走ります。遅れて倒れでもしたら即射殺です。エリ・ヴィーゼルは一生懸命父親の手を引いて走るのですが、お父さんの足はどんどん遅くなっていく。このお父さんと一緒に走っていたら自分も殺されるとエリ・ヴィーゼルは思います。共には走りきれない。そして彼はずっと手を離すのです。

エリ・ヴィーゼルは戦後そのことをずっとひきずるわけです。ひきずりながら彼は自分に言い聞かせようとします。はぐれてしまったんだとか、いろいろ。けれども行き着くところは、父親を捨てたということなんですね。己が生きるために。

私は大学に入ったばかりの頃、この『夜』を読んで、自分は人殺しなんてしないなんて、そんな偉そうなこと言えない。この状況だったら、私自身も同じ事をするに違いないと思いました。人は、自分だったらしない。とか自分は善良だとか、穏やかだとかいろんなことを言って生きていたり、心の深くに傷を受けた人が、その傷がなんとかかさぶたになり、大丈夫になったと思っているときに、本によって、パーンとかさぶたが剥がされたり、自分の中にも人を殺めるといふことがありうるんだということの思い知らされるわけです。

私は本にはそういう非常に大きな力があると思います。小田実が60年代に、まだベ平連作るか作らないかの頃だったと思いますけれども、自分がいちばいやなのは「私は生まれてこのかた、人様に後ろ指をさされるようなことは一度もしたことございませんの。ホホホ。」という奥様連中だと言ったことがあって、新聞か週刊誌か何かで読んだとき、私は小田実の言う通りだと思いました。

人は本当にしばしば社会の中で自分はいいいことをしていると思って、他人様はするけれども自分はしない。人殺しはしない。自分は人を傷つけない。自分は傷ついても癒えてしまっても大丈夫。と思っている。そういうときに、あるものに出会って、本だけではなく、映画でもそうだし、絵画でもそうだし、時には音楽もそうかもしれない、パーンと治りかけていた傷のかさぶたが剥ぎとられて血が噴き出したり、自分はぜったい他人を殺めるといふことないと思っていた確信が崩れていく。

昨日から今日にかけて、児童相談所に何度も相談に行ったけれども、言い分を聞いてもらえなくて自殺したという少年の話が報道されています。テレビの報道でみると児童相談所の扱いが悪いという批判が非常に強く出ているけれども、私がもし現場にいたらどうしただろうと、私もやっぱり動くことができなかつたと思います。児童相談所が対応すると言うことは、父親と子どもを、肉親を完全に引き離すということになりかねない。それをいまこの段階で決めていいのかどうか。児童相談所が非常に迷って、「もうちょっと待とう」ということを考えたというのが解らなくないんです。短大におりまして児童福祉の先生たちと話していると、どんなに親が酷いことをやっても子どもたちは「でもあの親を」といってかばうという。そこに踏み込んで親子の関係を切ってしまうといいのかどうか、とい

う問題が多分あります。そのせめぎ合いで非常に迷っていただろうと思いますから、児童相談所の人を私は責められない気がします。

私ども夫婦は1992年秋からロンドンに1年暮らしたことがあります。でもそれより5年前の1987年に、1カ月ほどロンドンに滞在したことがありました。そのとき下宿させてもらった家の奥さんは、ジャマイカ出身の方でしたけれども、CAV (Citizen advice bureau) という市民相談室の責任者をやっておりました。彼女は、子どもの虐待のことで踏み込んだりいろいろな通報を受けて動くときに、とても怖いのは、そのことによってその家庭を完全に壊してしまったり、親子の関係を完全に切ってしまうということになりかねない。そういうときは本当に迷うんだということを言っていました。二十何年ぶりに今度の事件で思い出しました。相談所の人のためらうのはわかるよな。と思う。そのためらいというのは結果的に死の問題になったけれども、ためらうことのほうが私は大事だという気がしてなりません。

子どもの問題を考えるときに、今私が一番腹を立てていることというのが、広島で、間違った情報で学校が推薦を与えず自殺させてしまった事件です。新聞に出ていた報告書を見たら、教師自身が言ったこととして「自分の思いを言えない生徒がいるなんて考えていなかった。」とあった。私はこれにはびっくりしました。何年来一番びっくりしたかもしれない。こんなことしか考えられなかったのか。先生たちは、本当に自身自分の思いを言っているの？と。先生たちを一方向的に責めるようで悪いけれども、もし思った通りのことを言っているとすると、そんな先生は自身が壊れているんじゃないかという気がした。自分が今どういう状況にあるかとか、自分が今どんな思いを飲み込んだかとか、どういうところを耐えているかとか、どういうところを歯がゆく思っているかとか、そういう感情を一切合財押し殺して仕事をしているのではないかと思った。押し殺しているうちにその感情があることを自分で忘れてしまったのではないかと思いました。私は自分の思いが言えない生徒がいるということを考えてもみなかったという言葉に、こういう人たちがでてきて教育の現場にいるんだということに愕然としました。

そしてもう一つ思ったのは、このごろとにかくプレゼン、プレゼンとプレゼンテーションが大事だと言われます。プレゼンテーションというのははきはきとものが言えて自分の意見を伝えることと言われるけれども、あるいは交流することと言われるけれども、沈黙に耳を傾けるということはプレゼンテーションの技法にはほとんど入れられていないのです。沈黙に耳を傾けるということができなくてどうして子どもと居られるの？人と居られるの？という気がする。そういうことがほとんど顧みられなくて、やたらとプレゼンテーションがあり、発表があり、どんどん議論ができてしかもそれが数値化されていく。そういう状況の中に子どもがいる。

ジュニア新書にも書きましたが、1年を通しての私のゼミで半年間一言も言わない学生がいました。どんな作品を読んでいるか話し合うだけの授業なのですけれども、何にも言わない。でも二回ほど言ってから声をかけるのをやめました。なぜって彼女の全身が表現

しているんです。いろんなことを表現している。そこで彼女の表情だとか全身の表現に必死になって私が耳を傾けようと思いました。そうすると面白いことが起こったんです。同じゼミの他の学生たちが、同じように彼女の沈黙に耳を傾けるようになったのです。彼女がどういう表情をするか、仕草をするか、そういうことを非常に丁寧に見るようになって、自分が発表しているときでも彼女の反応を見るのです。どういう風な表情でいてくれるか。後期になって彼女がぼつぼつと話し始めたんですけども、私はあの時のゼミの空気が自由でとても好きでした。発言されたことにも耳を傾けるし、発言されなかったことにも耳を傾ける。そんな、お互いにちゃんと耳を傾けることができる学生たちがいてくれたことに対して、今でも感謝しています。

今、その半年全然発言しなかった学生は、都内の重度の心身障害者の施設で正規職員として働いています。年に3回か4回ウィークデイに私の家でやっている読書会に、その彼女が仕事の都合をつけて、交通費を払って参加してくれているんです。そのうちに仲間まで連れてきて、今30代の人が3人、平均年齢63、4の読書会に入ってきてくれてまして、いろんな刺激を受けるので既存のメンバーは大喜びです。正社員で働いているので大変だと思うんですが、そんな彼女たちが休みを取って来ているのです

沈黙に耳を傾けるということなぜしないのかという。でも私も、失敗をずっとしていました。ある時はっと気がつきました。自分もひどい事をやってきたぞと。ジュニア新書にも書いた逸話ですが、ある時大学の別の先生をとっても怖がった学生たちいました。その先生はとても世話好きではたから見ていると良い先生にみえていたんです。でも学生たちのうち何人もが、怖い。研究室の前を通るのもいやだと言いだして、何があったのだろうと思って聞くと、「だって、怖いんだもん。あの先生に全部掴まれそうな気がする。」と言うんです。「なんでも話さない。私がなんとかしてあげるから」という一見すごく親切な先生を、学生たちは怖いと言い出したんですね。私はその学生たちの声を聞きながら、「まてよ。私もおんなじことをやってきたぞ。」と思いました。

ゼミの文学の授業で、一番感動したことを語り合おうと言ってきたことは、一番大事なことを出せと言っている事じゃないか。と思ったのです。昼休みにそんな一件があっただけで、昼休みの後の専攻科の授業で言いました。「私は同じことをやってきた。これまでやってきてしまったけれど、ごめん。今日から一番感動したことは話さなくてよろしい。話したくてしょうがなければいいけれど、二番目か三番目に感動したことを話してちょうだい。」と。学生たちの方が今度はぎょっとして、「先生、そんなことをしたらゼミが成り立たちません。」というんですね。私は言いました。「あなたたち、もう二十歳にもなったら、今、人が、友達がなにを飲み込んだかくらいを推察する力はできているはずだから、なにを飲み込んだかはお互いに推測する。禁止するわけではないけれど、話すことは二番目、三番目に感動したことでよろしい。」と。授業が終わってからある学生が教室を出しな「先生、今は話せないけれどこれから十年くらいしたら話に来れるかもしれない」と言っていました。ああ、わかってくれたなと思いました。

自分もやっているんですよ。そういうことを。一番大事なことと言うのは、本当に話さなくてもいいんですよ。めったなことでは話したくない。そういうことなので、「だまっている、言えない生徒がいるなんて、考えたことがなかった。」なんて、それでよく子どもの前にずっと立っていたな。と思いました。繰り返しになりますが、「先生自身はどうだったの？先生自身もそうだったんじゃないの？それくらい自分自身を見る力が先生自身になくなってしまっているのかもしれない。」とむしろそちらの方が怖く感じられました。

今度の広島県の府中町の事件を見て一番思ったのは、誰一人子どもに憤ることの大切さを教えてきていなかったのではないかと。ということでした。怒ること、憤ることがどれほど大切なことか。これは考えてみると、わたしが定年で短大を辞めたのが2010年でしたけれども、それより5年くらい前から、推薦入試の面接でいろいろな質問をする中で、私は定番のように「今一番憤りを覚えている事ってなんですか」ということを聞いていたのです。ところが、1年目2年目はまだ答えが出てきたんですが、3年目あたりからあれっと思った。もしかしたら憤りって意味がわかっていないかなと思った。とうとう5年目に面接の会場で、「憤りってなんですか」という質問が逆に来たんです。私はそれきりその質問は次の年からやめました。つまり、憤りとはなにかが本当に分からなくなっている。そういう学生たちがでてきている。怒ることが悪いことだとみんな思いこんでいる。憤りも悪いことだと思って、できるだけ避けるべきことだと思っている。児童文学を手渡すときに、私たちは憤らない子どもを作りたいと、ひょっとしてどこかで思っていないでしょうか。おだやかな子ども、やさしい子ども、誰に対しても親切な子ども、温かく接することのできる子ども。誰かこの生徒たちに憤りを教えたの？伝えたの？と思いました。親は伝えていないかもしれない。先生も伝えていないかもしれない。周りの人も伝えていないかもしれない。

これを伝えてくれている本ってどのくらいありますか？今朝準備をしているときに、絵本にもすごい子どもの憤りを書いたものがあったぞ。と思い出しました。『マドレーヌといぬ』のセリフ「院長殿覚えていなさい！！」。いぬをこっそり飼っていて、院長がそんな雑種犬はお品が下がります。追いだしなさい。と言ったとき、マドレーヌが椅子に飛び乗って「院長殿覚えていなさい！」と猛烈に憤る場面があるじゃないですか。そこを思い出したんです。読むたびに拍手します。やった！と思います。一冊の絵本の中に子どもの憤りをあんなに見事に鮮やかに書いている本があるのに、怒るとか憤るとかいうことは大抵マイナスとして、そうしないほうがいいことだと思われている。

もう一つあげると、映画で「パリ、20区僕たちのクラス」私は劇場で観たのですが、今はDVDも出ているのではないのでしょうか。この映画ご覧になった方いらっしゃいますか？私は子どもの本に関わる方にはたくさん映画を見てほしいと思います。静岡では、あのえん罪の袴田巖さんの映画が今浜松に来ていまして、これは観に行こうと思っています。なかなか地方にはいい映画が回ってきませんが。それはそれとして、「パリ、20区僕たちのクラス」という映画は、かぶりつきで観て、全く周りの人のことなんて消えてしまって、必

死になって観ました。ずっと映画のはじめから終わりまで、生徒たちが憤って、怒って怒って怒りをぶつけている。なんて素敵と。

この映画は実際の生徒たちを使っています。高校の先生が作った脚本で、ただその高校の生徒ではなくて、隣中等高校の生徒を使って作った映画です。その映画では本当に生徒が怒っている。先生はフランス語の国語の先生なのですが、移民が7割から8割を占めるという公立の学校の先生をしている。移民がフランスの社会に溶け込んでフランス語を話せるようになってほしい。そう願うのは国語の先生としては当然ですよ。そのことを非難はしません。でも先生が授業で例文を書いていくと、生徒がそのうちにわざわざ騒ぎ出すんですね。先生は何で騒いでいるのかわからないので聞くと、先生があげる例文の中に白人の名前しか出てこないからだ。これはすごい指摘ですよ。なんで白人の名前ばっかなの？先生には先生のほうで正当性があるなと私は思いました。オーソドックスなフランス語の文章を出そうとすると、少し古いものになる。古いものの中にはまだアメリカ系の人たちは出てこなくて、結局白人の名前が登場人物ででてくるのはやむを得ないと思います。でも、子どもたちは今この社会に生きている訳です。そして今、いろんなものにぶつかっている。そうすると、その先生の例文に白人の名前しか出てこないことは極めて異様に映るわけです。なんで白人の名前ばかりなの？と。先生は言われても一瞬何のことかわからないんです。生徒たちはもう一回がやがやと言い出して、はっと気がつくのです。生徒の言っていることはどういうことなのか。文法なんかきちんとやろうとすると、今度は白人の生徒が「うちのおばあちゃんでもそんな言い方はしないよ。」と言うんです。古くさいというんです。先生はちょっとぎゃふんとするんですけど、とにかくあの映画の中では、生徒がはじめから終わりまで怒り続けている。

その時私がなにを思っていたかということ、高校の教員をしていた頃のことでした。高校に9年間で3校に赴任しましたが、その2つ目の高校は、その地域の底辺学校といわれる学校でした。新任の時は進学校でした。そのあと最底辺の学校に行きました。なぜかという私がストに参加したからです。だいたい異動時には最初に希望聴取があるのですが、それもなしにパーンと飛ばされて行ったのがそこでした。ただこの2年は面白かったです。徹底的に教育とは何かを考えさせられるところでした。しかし、その生徒たちと、このパリ20区僕たちのクラスの生徒たちとの決定的な違いは、「あの子たちは一回も怒らなかつた。怒りをぶつけなかつた。」私は映画を見ながら思いました。この映画の子どもたちはこんなに怒っているのに、あの子たちは全然怒らなかつた。怒らないで何をしていたかという、ムカついてた。ムカつきです。先生たちに対する信頼なんで全然ないんです。そして、自分が言ったってしょうがない。どうせ。と思っている。ただ「どうせ。」と思っているだけじゃいられないから、ムカつくのです。

私はその学校で図書委員になって、図書館にちょうどその頃筑摩書房からとてもいい漫画全集がで出たので入れたんです。もちろん先生たちの会議で申請して。そうしたらある夕方どやどやと退学寸前というチンピラ連中が6,7人図書館にやってきて、私のところに

来てなんと言ったか。「先生、学校にマンガなんか入れていいだかえ」って言ったんです。

これには私は驚きました。古い人間ですから、優等生が言えばまだわかると。それが、一番だめだと言われている連中が、なんで学校にマンガなんか入れるのだと抗議しに来た訳？と思ったのです。それはそれから長い間私にとって宿題になりました。なぜ彼らはそうしたのか。そしてもう一つ、なぜ彼らはいわゆる落ちこぼれになってしまうのかということなんですね。

その生徒たちは卒業してからもちょくちょく遊びに来て、ある時言ったんです。「先生、俺らのことかなり知っていたと思うけれど、これは知らないだろうな。授業が終わるとポケットにコンドームつつこんで、オートバイぶっとばしてたの知ってた？」と。「知らなかった。」と私は答えるしかありませんでした。なんでそんなムカついていたんだろうか。怒りを知らないって、なんで怒りを知らないんだろうか。私にとっては、その後何年もそれが非常に大きな宿題となりました。そしてはっと気がついたのは、彼らのストライクゾーンがものすごく狭かったということ。つまり正しいと考える範囲がとても狭いのです。彼らは本を読んでいない、読んでもらったこともほとんどない。そして学校の勉強もよく分からない。よく、わからない勉強を6時間もじっとしていたと思います。そりゃオートバイをぶっとばしたくなるのもわからなくはない。

そういう状況の中で、彼らにとって正しいとか正しくないとか、いいとか悪いとかという判断ってどこから手に入れたものかということ、親と学校の先生なんです。本を読んでもいけば、「先生はああ言っているけれど、この本の著者はこう言っているぜ」という別のものさしをちゃんともてる訳です。「先生はあれは悪いといっているけれど、この本ではそれが善になっている」と。そのように物事を相対化する目を、本を通して手に入れることができます。

でも彼らはそういう生活をしてきていません。親御さんがそんなに本を読む人たちではなかったようにも思います。そして、先生からはおとなしくしろとしか言われぬ。なにしろ方言禁止の学校でしたから。職員室へ入るときにお辞儀をして、先生の机のところに行ってお辞儀をして、それからものを言えと。そんなことをしたら表現なんてできないですよ。私は自分の持っているクラスにだけはいいました。「あなたたち、先公って言いたくなったら言っていよ。私だっててめえらって言いたくなるから。時にはお前らって言いたくなるから。私に対しては敬語を使いたくなければ使わなくてよろしい。ただし、人を見てそれを決めなさいよ。この先生には使ったほうがいいのかどうか、そのくらいの判断は生きる力として必要です。」とやったんです。

とにかく「これは正しい」と考える範囲が狭いのです。それを広げてくれるのは、本だとか映画だとかそういったものです。一方ではまずいと言うが、一方ではそうじゃないと言ってくれる。そういうものにたくさん出会っていれば、どこかで叩かれても自分はだめだと思わずに済むんです。でも彼らは自分はだめだと思わないで済むものさしを持っていない。全く武器を持っていない。やっぱり自分はだめかなと思ってしまう。そうしたらも

うぐれるしかないわけです。ストライクゾーンを広げるために、いろいろな価値観、いろいろなものの見方に出会うということはどんなにその人に生きる力を授けてくれるか。映画や絵画、文学、芸術全般に触れる事は、非常に大きな力になるように思います。

ただし子どもの本の場合には、しばしばあたたかくてやさしくて思いやりのある子が出てくるわけです。怒る子なんてあんまり出てこなくて、穏やかになることがいいことだとか、お行儀よくなることがいいことだとかそんなことばかり、なんとなく結果的に伝えるような本が結構あります。特に日本の児童文学は優しいこと、思いやりがあることがとても大事にされています。かわいそうなことも大好きですよ。

岡村明彦さんという『南ベトナム戦争従軍記』を書かれた方の講演会に行ったときに、「僕はかわいそうという言葉は絶対使わないようにしている。」とおっしゃっていた。私はその時はなぜかわからなくて、質問の時間に「なぜかわいそうという言葉をお使いにならないのですか。」と聞いたら、「かわいそうという言葉ほど連帯を拒否する言葉はないだろう。」とおっしゃられてはっとしました。「かわいそう」というのは、人間のつながりを拒否する言葉だ、とおっしゃった。そう思って見ていくと、様々な場面でそういう事例があるんです。例えば『アコンカグアの奇跡』だったか、登山の事故の本でも、登山隊長がずっと上に行って帰ってこなかったんで、下のキャンプで待っている人たちが、もう駄目だろう。かわいそうにと思って、戻らぬ隊長に手紙をしたためました。そしてそのキャンプを引き払う時に残したものは、火を使わなければ食べられない食品だけ、つまり自分たちにとって荷になるものは全部置いて降りてしまったんです。奇跡的に生還し山から下りてきた隊長はその実態に出くわします。「かわいそうに」とこれだけ手紙をしたためておきながら、手を加えなければ食べられない食糧だけが残されていた。よほどいつも自覚していないと、私たちが同じことをやってしまいがちだという気がします。だってかわいそうと思う事って、すごく快感ですから。

3. 11の後、みんなが東北へ東北へと、気の毒な子どもたちに手を差し伸べようと思ったときに、私はとても偏屈と言われそうなんです、せつかくの機会を奪うなど言いたくなかったです。なんでせつかく今からいろんなものに耐えて自分を鍛えようとしている絶好のチャンスに、かわいそうだからとその機会を全部奪っていく。あんたたちにそれを奪う権利があるのか。と思っていた。でもあの頃そんなことを口に出したら大変でしたよね。ただ私はそう思っていました。

そうしたら牧真吉さんという、とてもいい面白いお仕事をいらっしゃる方なのですが、名古屋の児童相談所などに関わっている小児精神医学の医師で、愛知県で小児精神科学会の代表をやっているような先生から電話がかかってきました。その先生も同じことを考えていたんです。「清水さん同じことを考えているのなら、僕たちのと



ころへ来て話をしてくれないか。」とおっしゃるから、「先生、そこまでちゃんとわかってらっしゃるんだったら、ご自分で話せばいいじゃないですか」って言ったら、「だって清水さん、僕医者だろ？一応科学者だろ？科学者というのはデータが必要だ。文学者はいいいじゃない。そのまましゃべってくれれば。」という話でした。なるほどそれだったらやるか。と思って話に行ったんですが、牧先生のグループの人たちがまさに同じ思いをしていたんです。行っていいのかな？という思い。そりゃなにもかも大変でそばに立っていてあげなければならないという子どもたちもいたでしょう。けれどもみんながみんなそうではなくて、絶好の機会を必要とする子どももいるかもしれないのに。そういう思いを持った小児精神科の先生たちもいたということ、児童相談所関係の先生たちもいたということはお伝えしておいてもいいかと思います。

子どもの本って、「行く」ことに加担してしまいそうなんですよね。行って子どもから苦労だとか悲しみだとかいろんなものを奪ってしまう。「奪う」とは絶対言わず、「慰めてやらなければいけない」とか「手伝ってやらなければいけない」とか言うけれども、一人でしか成し得ない事っていっぱいあるわけです。その時にどういう態度をとるかというのはとても大事なことだという気がします。

もうひとつここ何年かずっと続いている風潮に、一人でいる子どもには声をかけなさい。ということがあります。子どもが昼休みに一人で図書館に行くっていうことに対して、先生たちは注意をするようにと言われていたらしくて、山口県の子どもの読書活動の会へちょくちょく行くんですけれど、いろんな会場で講演の後にお母さんたちが来て、「うちの娘は昼休みに図書館へ一人で行くことができなくなっちゃった。」と言うんです。「一人で行く子は、いじめられているとか、いじめられているかもしれないと、先生たちが目を光らせ始めてしまって、図書館に一人で行けないんです」と。このことは確かに私も新聞で読んだことがありました。文部科学省が学校で一人でいる子どもに注意するように、という通達か何かを出したことがあります。なんということをやるとしていいのかな。一人でいるということはとても大事なことのなのに、それを奪おうとする。そしてみんなで小さい時から「友達百人できるかな」で育てて、いつも友達が多ければいいとしている。

「LINEでどれくらいの子どもたちがつながっているとおもいます？」と10代の子を持つ編集者に聞かれて、うんと多く見積もって100人かな？と答えたら、「100人どころじゃないんです。200人を越えることもあるんです。そういう人たちとLINEでつながってしまうんですよ。」と言われました。そしてつながっていることがいい事だと思っている。友達が多い事はいい事だと思っている、一人でいることはとてもマイナスだと思っている。先生たちもそう思っている。周りの大人たちもそう思っている。悩むことや苦しむこと、悲しむことや沈黙していることが、みんなマイナスのことと思われてしまっている。学生たちとつきあっているとそれがよくわかります。

短大を2年、専攻科に進んで1年、せめてこの学生時代に一人でいる時間をたっぷり持つように。というと「一人でいてもいいんですか？」と学生たちが聞くのです。「一人で

いるってとっても大事なことじゃない？」と言っても、半信半疑なんです。それは短大の学生だけではなく、東京女子大の大学院の学生も、私が「うんと悩みなさい。」と言ったら、「本当に悩んでもいいんですかねえ。」と聞くんですね。大学院までなにを勉強してきたのと思いましたけれども、現実はそのなんです。

小林亜星、このごろメディアに出ていないので死んだのかと思っていましたが、この間誰かのお葬式に出ているのを見ました。ああまだご存命だった。しまったと思ったんですけど、勝手に殺してしまってすみません。その小林亜星がかなり前にテレビで「コマーシャルソングには半音は使えないのです」と言ったのです。おっ、なるほどと思いました。半音を使う、ピアノで言うと黒鍵のところ、不安だとかさびしさだとかためらいとか迷いとか、そういうものを音で表すのに半音はとても有効です。単音階だけだったら全く単純なことになる。その一言を聞いてから小林亜星は信用できると思いました。コマーシャルソングに半音を使ったら、商品に手を出そうとするときにためらいを、不安を生じさせてしまう。コマーシャルソングにならない。今、私たちを取り巻く様々な音の中にどれくらい半音がありますか？ないんですよ。ためらうこと、迷うことは悪いことでまずいことだと、早く決定しなければだめだと、決定をぐずぐずしているのはだめだと、無能な人のやることだという空気が広がって行って、コマーシャルソングが暮らしの中に溢れている状況になると、悩んだりすることをすごくいけないことのように思うのも、無理ないと思います。

さらに怖いことが起こっているなと思う場面がありました。私が住んでいる町で小さな市民の学習会をやりました。学校の先生たちが今すごく忙しいという。子どもたちと向き合う時間がないという。学習会は現場を離れて何年もたつ人も多いので、現場の先生を呼んで実態を聞いてみよう。という会をやったのです。いらした先生方は、「本当に授業の準備ができない。子どもたちと向かい合う時間がない」とおっしゃいました。あちこちで聞くとおりのことです。私は「それができなかつたら、教師であるという事それ自体が崩れているという訳で、なんでその現実に抵抗しないんですか。」と聞きました。その問いの中にはサボタージュの意味もありました。出せと命じられているけれど、提出した先ではだいたい読まれていない書類を、いいかげんに書いて出すとか。それも含めて口には出しませんが、「なんで抵抗しないんですか？」とだけ聞いた。するとそこにいた 50 代半ばの先生がなんとおっしゃったか。「そんなことは私たちにはできません。私たちは人間である前に公務員ですから。」私は愕然としました。公務員である前に人間だと思ってきたけれど、人間である前に公務員ですか。と。ここ 10 年ほどコンプライアンスの大合唱の中、そのような意識が徹底して公務員や教員たちに押し付けられてきた。押しつけられたという自覚があればまだいいけれど、自分がそれを自由意思で引き受けてしまった。それが今の状況だと思っています。もちろんそうでない先生、図書館員、公務員はたくさんいますが、大方の空気として人間である前に公務員なければコンプライアンス違反だ。と言われて徹底的にやられるわけです。

コンプライアンスって語源をたどってみると面白いですね。服従 (obedience) というのが語源です。二十年くらい前に出た古い英和辞典を引くと、コンプライアンスという言葉の意味に「法令順守」というのは載っていないのです。十二、三年前に出た研究社の英和辞典にやっと、最近の用例として、企業用語として法令順守と言う訳語が出てくる。ついでに言うクライアントもそういう言葉です。クライアントというのは、語源をたどっていくともとは奴隷と言う意味です。私はいろいろな相談員がクライアントに「私に何でも話しなさい」というのはなんか変だなと思っていたことがありますが、そう、まさにクライアントというのはローマ時代の奴隷のことなのです。

話をもとに戻すと、人間である前に公務員であるという発想が本当に強くなっています。もうひとつ、私の住んでいる町でこんな事態が起こっています。市の広報のアナウンスで火事の通報があります。「ただいまどこそで火災が発生しました。火災はその他火災です。」と言うのです。「その他火災」って何のことか全然わからないわけです。電話をして「その他火災ってなんですか」と聞いたら、「その他火災はその他火災です」と言うのです。「その他火災の中身がわからなんです。」と言っても「でもその他火災なんですから。」と言うので、しょうがなくその時は電話を切って、1カ月くらいしたらまた同じ放送をしている。やっぱり全然考えてくれなかったんだなと思ったけれども、もう一度電話してみて同じことを言われました。半年くらい考えてはっと思いついたんです。もしかしたらあれは住宅火災とか、山林火災とかの分類のことを言っているんだ。それらの分類に入らないものはその他火災になる。原稿を読んでいる人、原稿を渡した人はなにも間違ったことは言っていない。でもそれは彼らの論理で、市民には全然伝わっていないわけです。それが広報の仕事として成立しているというのはすごくおかしい。と私は思いました。何のためにあなたはそこに立っているの？ なんのためにそこで放送しているの？ でもそれは公務員だから、その他火災で通るんですね。後から消防士だった人に聞いてみたら、やはり分類のことを言っているそうです。彼にとっては当たり前のこと、「他に入らないのはその他に入れているからすべてその他火災なんだよ。」ということだったのです。「だって、そんなこと言ったって通じないじゃない」と思ったんですが、そういうことはもう一つあったんです。

去年の夏は静岡もとても暑かったんです。静岡地方気象台が「本日は日中の気温が 39℃に達するから気をつけてください。」と言った。それが四日ほど続きました。一、二日目は本日はというのは引っかけからなかったが、四日目になっても「本日は」と言っている。なんで「本日も」じゃないの？ と思ったんです。「本日は」と平気で放送できる感覚ってなんだろうと思っていました。原稿ができているのだろうなと思いました。周りの人にその事を言ったら、またそんな小さいことでぐずぐず言う。と言われてしまいました。信頼していた夫にまで「なんでそんなことが気になるの」と言われて、私はあなたのことを信頼していたのにと不信感を持ったんですが。

でも私がすごく気になったのは、役所言葉が生活の言葉をどんどん隅っこに押しやっていく。身体感覚や暮らしの言葉を押しやって、役所言葉がどんどん中心になっていって、

私たち自身がそれに鈍感になっている。そういう事態が今起こっていないだろうか？政治家の言葉だとか、専門家の言葉だとかで言われると、ハハーッとなってしまっている。それが人間である前に公務員ですからという人に対して感じていた抵抗だったのか。と思ったのです。

短大で 34 年授業をやって来る中で、私はできるだけひらがなで授業をしようと思ってきたんです。学生たちはどういう反応をするかという、「他の先生はラテン語を使ったり、漢字をいっぱい使うのに、先生は使わないんですね。」とバカにするんですね。さらに、「先生ってなんかおかしい。」というのです。どうして？と聞くと「だって先生はいつも私たちの身近な言葉でしかしゃべらない。大学の授業じゃないみたい。」と言うから、「あなたたちの考えている大学の授業ってなに？」と聞くと、「ノートがいっぱいになること」って言いました。これは面白かった。私はノートも取らなくてよろしいと言っています。学生はどう答えるかという、試験の時困るといふ。そこで私は、忘れていいものは人間だいたい忘れるし、必要なものはどこかで覚えているからいい。そんなことを覚えていなくても書けるものを出すから大丈夫。ノートなんてとるな。と言うんです。

学生が「どうせ、大人なんて。」というので、短大にいた三十年間、自分の本当に出会わせた人年間 10 人ほど外から呼んできて、2~3 回ずつ授業をやらせてもらいました。その時も学生はノートをとるんです。静かにしてひたすらペンを走らせる音がするんです。ずっとうつむいている訳です。「もったいない！今日はライブなんだから、その先生がどんな表情で語り、どんな所で間を置くか、どんな声でどんな話をするか。生きてなまの先生がここにいるのに、ノートをとるなんてもったいない。」と言ったんですけど、それでもちょっとするとすぐまたノートを取り始める。学生たちはそれが勉強だと思っているのです。私はそれはちょっと違うのではないかと思って、ノートをとっただけでは答えられない試験問題を出したりしたのですけれど、でも、小さい時からそのように思い込まされてきているのだと思います。ひたすらノートをとることがお勉強をすることなんだ。心ふるわせるなんてことはしてはいけなないんだ。ワーッと喜んでいてはいけなないんだ。

ローベル・ドアノーという写真家は、70 を越えてからの自身の写真展で言いました。「長く生きてきたけれど、あんまり楽しかったので、人生、私は学ぶことをすっかり忘れていた。」ドアノーはパリ市庁舎のキスの写真で有名ですが、彼はルノーの労働組合に入っていて、組合員の写真も撮っています。本当に普通に生きる人たちを撮っているのです。その彼が長年生きてきたけれどまことに楽しかったので、学ぶことを忘れていた。と言うのです。私はその言葉に出会った時、嬉しくて嬉しくてスキップしてしまいました。こういうふう生きてきた人なんだ。けしてふわふわと生きていた人ではないんですよ。彼の仕事をみていると、どこに目を付けているか非常によくわかるんですね。ドアノーの写真集が出版されていますのでいつかご覧になるといいと思います。この図書館にもあると思います。

でも学生は小さいころから、ノートをとることが賢い事、良い事、勉強というものはそ

ういう事だ。覚えることだと思っている。そして答えを知るのが勉強だと思っている。そういうふうに思い込まされてきた学生たちは、授業をそんなふうにし受け取れないんですね。私はなぜひらがなで授業をしようと思ったかと言うと、暮らしの中で易しいけれど質を落とさないでどれだけの事が出来るかということ、自分に課していたのです。暮らしの言葉で考えようということです。

実はゲド戦記を訳す時もそうでした。とりわけテナーの言葉を考えるときには、あの非常に豊かなテナーがどんな言葉をしゃべるのかと思って、日本の書き手だったら誰の言葉だろうとそんなことを考えながら訳しました。でも今は授業で学生たちは情報が欲しいんです。学生が求めているものは情報と知識なのです。そうではなくて自分をぶっこわしてくれるもの、そういうものに出会うという事をまるで考えていないようです。とても狭いのです。だからちょっと道を外れると、ああ自分はもう駄目だと思ってしまう。そしてトイレランチをとるような学生が出てくる。お昼にランチメイトがない、一人ぼっちだというのは負け組のすることだから、それを人に見せたくないからトイレでご飯を食べる。私も1回だけ学内で目撃したことがあります。実際にいるんだと思いました。一人でいるところを絶対に見せたくないんです。本を読んでいたなら、そんな状況をおかしいと思うでしょうけれど、子どもたちはそういう場に置かれている。

しかも問いから答えまでが出来るだけ早いことが優秀なことだとされています。問いから答えまで何日もかかっているはいけないんですね。とにかく早いこと、短いこと。これについては、ル・グウィンが『いま、ファンタジーにできること』で言っていますね。「子どもは問い方を学ぶために本を読むのであって、答えを教わるために読むのではない」と。この本はあちこちの講演だとかエッセイを集めた本です。その中でこんなことも言っています。「本という存在も学校教育も、人を答えに導くものではなくて、常に新たな問いへ導くもの」であってほしい。これは私の思いですが、答え導くものではなく、新たな問いへ導くものであってほしいなと思う。ル・グウィンは同じことを考えていたと思うのです。子どもは問い方を学ぶために本を読むのであって、答えを知るために本を読むものではない。でも答えを教わるために本を読む人はものすごくたくさんいます。人生でなにかにぶつかった時もそうです。ハウツーを知るために本を読む。悪くはないけれど、それだったら今やコンパス、コンピュータがある。答えだけだったらコンピュータが答えてくれます。危ないところもあるけれど便利だろうと思います。

もうひとつ『日本の反知性主義』という本を挙げます。この中で内田樹さんがロラン・バルトの言葉を引いて無知というのは何かという事を言っています。「知識の欠如ではなくて、知識に飽和されているために、未知のものを受け入れることができなくなってしまった。それを



無知というのだ。」内田さんはおそらくこの言葉をずっと前に読まれていて、『十四歳の子を持つ親たちへ』という本も書いていますが、その中でも同じようなこと言っておられます。それらの言葉を読んで、私はとにかく勉強するために本なんて読まない。と思うのです。本と言うものは時にものすごく怖いものでもあります。最初に言った自分の中の闇を引き出すということもあります。世の中の悪に惹かれるという、悪が非常に魅力的に見えるという時があるわけで、誰もそういうものにぱっと行ってしまいかもしれない。そういうものが口を開けて待っているわけです。それに私は出会っても構わないと、ただ不幸にして変な時に会うという事もあるんですけども、それでも構わないという気がします。

私自身は、読書はじっと読んで知るとか与えられるとかじゃなくて、体験だと思っています。本を読んでも中身をすぐに忘れてしまうという人もいますが、それがどうして悪いの？と思います。その時間を生きて体験して、わくわくドキドキしてそれだけでいいじゃない。読み終わって全部忘れてしまっても構わない。必要なことは何年か経っても出てきます。私は全然覚えている必要ななんてないと思います。授業だって覚えている必要はない。きっとその人に必要なものは必要な時にどこかで出てくるから良いと思うんですけど、本の内容は覚えていなくてはならない。という思い違いがあるような気がします。読書というものが体験だとすると、私はこの講演のタイトルがいいね、と最初は思ったんですが、いろいろ準備しているうちに、ちょっと待てよ、このタイトル変えたいなと思うようになりました。どんなふうにしたいかというと、私は本を読むってその時間をふるえながら生きることだと思うんですね。わくわくドキドキしながら、体を震わせながら生きることだと思うと、このタイトルは「ふるえよう、この豊かな世界で」と変えてしまってもいいんじゃないの？と思いました。

そして本でなくともいいんです。本を読むと賢くなると多くの方がいいですが、本を読めば読むほど阿呆になっていく人っていっぱいいるという気がするのです。もし本を読んでも賢くなるのなら、大学の先生くらい本をたくさん読んでいる人はいないわけで、じゃあ大学が良くなっているかということ、全然良くなっていないじゃないですか。あそこが知の発信基地になっているかということ、そうでもないぞと思う訳です。もっとふるえること、自分を壊すこと、本を読んで自分を壊される。また創ろうとするけれど、また壊されていく。創っては壊し、創っては壊しというのが本を読むことで、本だけでなく映画でも何でも、人に会う事でもいいですね。そういうふう生きていくほうが生きてって感じがするな、と自分では思っています。

実は昨日素晴らしいご夫婦に会ってきたんです。三時過ぎに長野に入りまして、この人にだけは会いたいと、一度も会ったことがなかったのですが、リンゴ農家です。79 と 78 のご夫婦がリンゴを作っているらしいことをある方から教えられて、リンゴってこんなに美味しかったかと思うリンゴに出会えて、ここ三年くらいお願いしているのですけれど、その方たちがどういう方なのか、どういうふうなところに住んでおられるのか、ちらっと

でも、前もって連絡すると準備なさるかもしれないので突然、お会いできれば出来たでいいし、出来なくてもいいと思って伺ったんですけれど、たまたまお二方ともいらして小一時間縁側で語らうことができました。すごく嬉しく思いました。こういうご夫婦がいて下さるといふ事が。本はたいして読んでいないかもしれない。でも奥さんは読んでいらっしゃるのかな？でもおつれあいさんは、なにか読んでいるかもしれないけれどそんなことはおくびにもださないで、静かにリンゴを作るのはこうやるといいんだよ。とかいろいろと話して下さいました。本は下手をすると読めば読むほど人を阿呆にするとおもいます。大学の先生と話しても、あんなに素敵な人と会えるなんてめったにないと、昨日はそのご夫婦に会えたことで興奮してしまいました。

本を読むということに話をもう一度戻します。本を読むことって私はずっと自分を壊すことだと思ってきたんですけれど、そうでない読み方ってあるんだなというのは、子どもと関わる読書運動をしている方たちに会う時しばしば疑問や不安として感じます。齊藤敦夫さんが言うような不安ではないですよ。齊藤さんは「気をつけよう。暗い夜道とボランティア」と言って長野の方たちに叱られたんですか？そのことをあちこちで言ってもすごくひんしゆくを買っているのは知っていますけれども、そこまでは言いませんけれども、なにかを子どもに伝えようとするときに、ひょっとしたら自身は動いてないんじゃないですか。自分は、すでに獲得したものとして安全地帯にちゃんといて、その中から子どもに伝えるということをやっているんじゃないか。自分自身がいつも壊されながら、壊しては再生し壊しては再生し、そういう状況の中で子どもに伝えているのか。自分にはもうこれだけの教養があり、これだけの本を読んできて、だからこれだけをおすそ分けと伝える。伝える側が本当にふるえているかどうかということで、受け取る側は全然違うような気がします。大人だってこんなにふるえるんだ、大人だってこんなに不安なんだ、大人だってこんなに壊されるんだということ、それが子どもに伝わって、初めて子どもと大人はきちっとつながることができるような気がします。別に「子ども時代はあなたのように不安だったわよ。」じゃなくて「今だって不安なんだ」と「今だっていろんなものにぶつかって悩んでいるんだ」と、そうすると共闘というか一緒に手をつなぐことができるという気がするんです。

そういう本って実は児童文学の中にすでにたくさんあります。例えばフィリパ・ピアスの本というのは、ご本人は「私の作品はメランコリックだから、アメリカでは全然出版されないの。」とおっしゃったけれど、1987年あたりのことですね。その頃まだ日本では出版されていましたが、この頃はほとんど本が版を重ねていないのではないのでしょうか。フィリパ・ピアスの本なんてメランコリックで七面倒くさいと思ったりして、つまり明るくてほわほわしない。わくわくしない。でもあんなに子どもの悲しみをしっかりと受け止めている本で、ちょっとないんじゃないですか。それから人を理解するとはどういうことなのかということを描いている本、『まぼろしの小さい犬』がそうですね。ほとんど絶版で今はもう手に入りません。別に答えを求めて彼女は書いているわけではないんですけれど

も、理想の現実じゃなくて、ちょっと譲らなきゃならない現実をどうやって自分が引き受けるかということを書いている。ほとんどの現実がそうですよね。理想の現実なんてないからどこかで譲らなきゃならない。そんな現実をどうやって子どもが自分の中に引き込んで、引き入れて、引き受けて、抱きしめるかというその葛藤をあんなに見事に丁寧に描いている作家って他にいますでしょうか。にもかかわらず読まれていないんです。

いじめは問題だということで、いま NHK はいじめ撲滅キャンペーンやっていますけれど、私は NHK のプロデューサーはなにやっているのと思います。AKB48 が出ていてやっているキャンペーンの中で一冊も本が取り上げられていない。たとえば『百まいのドレス』にはあんなにいじめの力学がきちっと書かれている。小学 3 年生でも読んだらわかります。いじめられる側のつらさ、いじめてしまう側のつらさを両方書いている本があるのに、一冊も取り上げられていないのです。あの番組のプロデューサーは、NHK は、本に対しての信頼なんて持っていないのかと思ってしまう。同じように私たちもまた、いじめが起こった時に心理学カウンセラーにしゃべらせたりする。でもいじめの心理を描き出した本は結構ある訳です。『ゼバスチャンからの電話』の中には、どういうときにいじわるになるか。いじわるになりたくないけれどいじわるになってしまう時などが見事に描かれています。お母さんが自動車教習所いくと、自動車教習所の教官がお母さんに対していじわるする。いじめるわけです。なんでいじめるかという、お母さんがものすごく卑屈になるからなのです。卑屈になった人間に対して、私たちはいじめたくなってしまう。人間の卑屈さは他者の中にそういう感情を呼び覚ましてしまう。その力学を非常に丁寧に書いているのに、でもこれも読まれない。本当にそういう本はたくさんあって、いくつか挙げたのはそういう本のなかの一つなのです。

『もりのなか』を挙げたのはなぜかという、ひとりであることってどんなに素敵なことか、働きかけないでいることが、どれほどに豊かさをもたらすものかということを見せてくれるからです。『わたしとあそんで』もそうでしょうか。「あそびましょ」と言っても、みんな行っちゃうんですけれど、黙ってじいっとしていると、戻ってきますね。あんなにすてきな絵本があるのに、そういうこととしては受け取られなくて、保育関係の先生たちは依然として実習に行く学生に、「一人でいる子には声をかけなさいね」と言うのです。一人でいるときに、周りの大人よりはるかに深い時間とその子が生きているかもしれない。そこにどかどかと入りこんで、かきまわして。大人はなにをやっているのかと思います。

子どもがどんな時間の中にさまよい出ていくか、実は私は 34 年間ずっと短大の授業で絵本の読み聞かせをやったんです。楽しさを知らなくて絵本論なんてやったってしょうがないと思ったので。絵本論は後から自分でやればよろしい。とにかくおもしろさ、深さ、楽しさを知る。学生はなんて思って来ているかという、絵本なんてなんで勉強しなくてはいけない訳？と思って来ている。私たちはとっくに卒業していると思っている。あんなの子どもやるもんでしょ？いくら保育園や幼稚園の先生になるからといってなんでいまさ

ら絵本やらなきやいけないの。これを助長しているのが中学校の職場体験だったり、絵本の創作だったりする。中学や高校の美術の時間、家庭科の時間で、しばしば絵本を作っている学校が静岡なんかではあるんです。そうすると、絵本は誰でも作れると思っている。ちゃちな本だと思ってしまうのです。一流のものを全く知らないでそういうことをやっている。先生も一流のものを知らないでやっている。だからたかをくくることを覚えさせてしまう。そういうことをとてもまずいと思っているのですが、学生たちはそう思って来ているわけです。なんで短大まで来て絵本なのと思っている訳で、そこを第一回目の授業でぶっ壊さなくてはならない。大学の一番最初の授業って怖いすよね。全力投球しないとここでそっぽ向かれたらアウトですから。私も毎年毎年ものすごく緊張してやりました。

そして毎年読んだのが『はなをくんくん』。読んでいくとはじめ何をやるつもり？という顔をしているのですが、だんだん静かになってくる。本当に静かになっていって、読み終わってもまだ静かにシーンとしている。そのうちにガヤガヤし始めると、「お、帰ってきたぞ」と思うわけです。この学生たちあの世にいついたな。あの世に行って、あの世の時間を生きて、いまぞろぞろ帰ってきたなと思って、ときどき私が「お帰り。」というと、きょとんとした顔をしている。あの世とこの世の行き来を学生たちがしてくるわけです。初めての学生だってしてきます。『アンジュール』をやったときは困りました。もう言葉がないから。しかも次の時間に英語の試験があったらしくて、教室に入ってきたらみんなノートを開いて英語の勉強をしていました。もうこりゃ対決だ。と思いました。そして、「あなたたちは試験の勉強をしていてよろしい。私は『アンジュール』読むからね。」と言って、言葉はないんですけれど、そして両方が対決を黙ってやり始めました。7, 8人は最初から見えていたんですけれど、最初から丁寧に見ないと、ストーリーがうまく展開しないので様子を見てもう一回初めからゆっくりとページをめくっていったんです。120人くらいの教室で。そうするとだんだん顔を上げはじめたのね。そして最後にはみんなが顔をすっと上げたんです。ほとんどの学生が顔をあげて、やった、私勝った。と思いました。

そういう体験をどうしても私はさせたいと思いました。授業以前にわくわくドキドキして、そしてある時には自身がつぶされそうになり、ある時には自分の罪深さに悶々とするようになり、ある時は生きているっていいなあと思うような体験。とにかく体験として文学を読むことができたと思うのです。いじわるされているときに仕返しをするというのは、学校の先生は誰もそんなことをするもんじゃありません。品が下がりますよ。と言いたいけど、カニグズバーグは、「いじわるされたら仕返ししたっていいじゃん。ただしあんまり両方傷つかないようにね。」と言って作品の中で実にスマートな仕返しの仕方を教えています。『魔女ジェニファーと私』の最初の方に出てきますね。主人公のエリザベスは転校して来て友達がいなくて、その日もいじわるされて自分の住んでいるマンションに帰ってエレベータを開けたら、そこに今日自分にいじわるした女の子たちが乗っていた。彼女どうしたか覚えていますか？エレベータを閉めて階のボタンを全部押した。自分は次

の自分の階でさっと降りて、止まらなくてもいいところにいちいち止まって行くのを見て留飲を下げた。そういうスマートな仕返しの仕方もちろんと文学の中で教えてくれるのです。別にそれが目的ではないですけども。

中学校になってポルノ雑誌など、男の子だったらもう読むようになる。こっそりと読むようになる。それに対していったいどう対処すればいいか。カニグズバーグは『ベーグルチームの作戦』のなかでちゃんと言っています。「だれその家はおばあさんがものわかりがよくて、ポルノ雑誌を定期購読してやっている。それなのにあんたはやらないの？してあげなさいよ。」とお母さんのお姉さんにあたる人が言うんですね。その時にお母さんが何と言うか。すごく面白いすてきな言葉をいう。「だってポルノ雑誌を定期購読されたらとんでもないですよ。ポルノ雑誌は隠れて読んでこそそのポルノ雑誌なのに。」カニグズバーグは物語の中で大人に痛烈な批判を浴びせかけて、しかも十三歳という歳をどういうふうに乗り越えるかということ、実に具体的に楽しく書いている。にもかかわらずそれが10代の人たちに届いていないことをとても残念に思います。

幼年文学まではわりと届くんですけど、小学校高学年から中学生に対してなかなか届かず、そういう本は読まれずにたくさんあります。多分この図書館にもあまり借り出されずにあるかもしれない。とにかく使える宝はいっぱいあります。人にありがとうって言いなさいと教育されたら、でもいつもありがとうって言わなきゃならない人がどんな思いでいるか、ということが『十一歳の誕生日』のなかにきちっと描かれています。それを読みながら大人自身がまず壊され、固定観念から解き放たれて、もう一回子どもに向かい合う。子どもと自身を開放していく。本を読むということはそういうことにつながっていると思います。